

生と死の斷片

一

七月二十五日。今週私の家に三つづ變つたおとづれがあつた。

第一は井戸替職人であつた。毎年一回は凡ての井戸がからになるまで吸み替へられねばならぬ。さうしないと水神様の怒りを招く。この折に私は日本の井戸とその守護神の事について學んだ事が多少ある、井戸の守護神には名が二つあつて、又水波之賣命ミヅハノメノミコトとも云はれる。

水神様は水を清く冷くして凡ての井戸を守護する、その代り家主の方では嚴しい清淨法を守らねばならない、その規則を破る人には病氣それから死が來る。稀にこの神は蛇の形となつて現れる事がある。この神に捧げてある神社を見た事はない。しかし毎月一度神主が井戸のある信心深い家を訪ねて水神に何か古い祈りをする、そして井戸の端に何かの符號の小さい幟を立てる。井戸替のあとでもやはりこの事がなされる。それから新しい水をくむ第一のつるべは男子によつてくまれる、もし婦人が初めに水をくめば、その井戸はそれからあといつも濁るからである。

水神にはその仕事の小さい助手がある。日本人が鮎と呼ぶ小さい魚である。水蟲を退治するた

めに一つ二つの鮒はどの井戸にも飼つてある。井戸替の時この小さい魚を甚だ大事にする。私が始めてうちの井戸に二つの鮒の居る事を知つたのは井戸替職人の來た時であつた。鮒は井戸に水の満つる間冷水の桶に入れられて、それからもの淋しさへ再び投ぜられた。

私の井戸の水は綺麗で氷のやうに冷たい。しかし今ではそれを飲む毎にいつでも暗黒のうちに徘徊して、下りて來て水に落つるつるべによつていつまでも驚かされるそれ等の二つの小さい白い生命を思はずには居られない。

第二の變つたおとづれば、裝束をつけて手で動かす火消ポンプを携へた土地の消防であつた。昔の習慣に隨つて土用の間に年一回彼等の持場を一廻りしてあつい屋根に水をまいて、富んだ家から何か少しの報酬を受ける。長い間屋根に雨が落ちなければ太陽の熱だけで燃え出す事もあると信ぜられて居る。消防は私の屋根、樹木、庭園へ蛇管スネパイプを向けて非常に清々した氣分にしてくれた、そしてその代りに私は酒代を與へた。

第三のおとづれば、地藏のお祭りを適當に行ふために少しの助力を乞ひに來た子供の總代であつた、この地藏の堂は街路の向側で丁度私の家に面したところにある。私はその資金へ寄附する事を甚だ喜んだ、私はこの溫和な佛を愛するからである、そして私はその祭禮は面白いだらうと思つた。翌朝早く私はその堂がすでに花と奉納の提灯とで飾つてあるのを見た。新しいよだれか

けが地蔵の首の廻りにかけられて、佛式の御膳はその前に供へてあつた。あとで大工連が子供の躍るために地藏堂の廣場に舞臺を組み立てた、そして日のくれる前におもちや屋連が境内に一系列の小屋をたてて商店を列べた。夜になつて私は子供の躍りを見るために如何にも綺麗な提灯の光の中へ出かけた、そして私は私の門の前に三尺以上の巨大なとんぼの止まつて居るのを見た。それは私が子供等に與へた少しの助力に對する彼等の感謝のしるしの飾りであつた。私は一時その眞に迫つて居るのにびつくりした、しかしよく調べて見ると、からだは色紙でつつんだ松の枝で、四つの翼は四本の十能で、光つた頭は小さい土瓶である事を發見した。全體は非常な影のでるやうに置いた提灯でてらされてゐた、その影も考案の一部であつた。美術的材料の一點もなくしてつくつた美感の驚くべき一例であつた、しかも全くそれは僅か八歳の貧しい子供の仕事であつた。

一一

七月三十日。南側の私の隣りの家（低い陰氣な建物）は染物屋である。日本の染物屋のあるところは、日に乾かすために家の前に竹竿の間に絹や木綿の長い切れ、濃い青、紫、薔薇、薄青、銀鼠の色の廣い帯が張り渡してあるのでいつでもすぐに分る。昨日私の隣人がその家庭を訪問するやうに私を誘うた。そしてその小さい表の方を通つたあとで、私はどこか古い京都の御殿に置

いてもよい程の庭園に臨んだ奥の縁側から眺めて居る事に氣がついて驚いた。そこに優美な築山の山水があつた、そして清い水の池があつて不思議に複雑な尾をもつた金魚があつた。

暫らくこの景色を眺めて居ると、染物屋は佛間になつて居る小さい部屋へ私を案内した。何でも必要上小規模にできて居るが、私はどこの寺でも、これよりもつと美術的な物を見た覚えはない。彼は私に千五百圓かかつたと告げた、私はそんな金額でどうして足りたか分らなかつた。三つの入念に彫刻した壇、——漆と金とで光つた三重の壇、やさしい佛像の數々、多くの精巧な器物、黒檀の經机、木魚、二つの立派な鐘、つまり一つの寺院の諸道具一式が縮形になつて居た。私の主人は若い時お寺で勉強した事があつた、そして御經を知つてゐた、淨土宗に用ひられる御經は悉くもつてゐた。普通の讀經なら何でもやれると私に語つた。毎日一定の時刻に家族全部がお参りのために佛間に集まる、そして主人は一同のために讀經する。しかし特別の場合には近所の僧が來てお勤めをする。

彼は私に盜賊に關する珍らしい話しをした。染物屋は格別泥棒に入られ易い、幾分はそこに委託してある高價な絹のため、又この職業は儲けが大きいと知られて居るからである。或晚このうちへ泥棒が入つた。主人は町にゐなかつた、老母と妻と女中だけがその時うちにゐた。覆面をして長い刀を携へた三人が、うちに入つた。一人は女中に職人が誰かまだこの家に居るかと尋ねた、そこで泥棒をおどかさうと思つて、女中は、若い衆は皆未だ仕事をして居ると答へた。しかし泥

棒はこの證言にはびくともしなかつた。一人は入口に立番し、二人は寢室へ大股であるいて行つた。女達は驚いて立ち上つた、そして妻は『どうして私達を殺さうとするのです』と尋ねた。頭らしい男は答へた、『殺さうとは思はない、金が要るだけだ。しかし金を出さなけりやかうだ』と云つて刀を疊につきさした。老母は云つた、『どうか嫁をおどかして下さるな、さうすればうちにあるお金はありたけ上げます。しかし御承知下さい。倅は京都へ行つてゐますから澤山あるわけはありません』彼女は金簞笥の引出しと自分の財布とを渡した。丁度二十八圓と八十四錢あつた。泥棒の頭はそれを數へて甚だ穩かに云つた、『あんたをおどかしたい事はない。あんたは大層信心深い人だと云ふ事は知つて居る、それで虚言は云はないだらうね。これで皆ですか』『はい、皆です』彼女は答へた『おつしやる通り私は佛法を信じて居ります、それであなたが今私の物を取りにお出になるのは全く昔私自身前の世でああなたの物を取つた事があるからだと思つて居ります。これはその罪のための罰です。それでですから虚言を云ふどころか、この際前の世でああなたに對して犯した罪の償ひのできる事を有難く思ひます』泥棒は笑つて云つた『あんたはよいおばあさんだ、あんたの云ふ事は疑はない。あんたが貧乏だつたら、わしもあんたの物を取らうとは思はない。そこで着物を二枚ばかりとこれだけ欲しい』と云つて甚だ立派な絹の羽織に手をかけた。老婦人は答へた『倅の着物は皆でも上げませう、しかしそれは取つて下さるな、倅の物ぢやありません、只人から染めるために預かつて居る物ですから。私共の物なら上げますが、人様のものは上げられません』『それは全く道理だ』泥棒は承認した『それぢやそれは取らない』

僅かの着物を受け取つたあとで、泥棒は甚だ丁寧にお休みなさいと云つたが、婦人達に自分等のあとを見送らないやうに命じた。年老いた女中はやはり戸の近くにゐた。泥棒頭はそこを通つたとき『貴様は虚言をついたな——それやる』と云つて彼女を打ち倒して氣絶させた。泥棒は一人もその後捕へられなかつた。

三

八月二十九日。或佛教の宗派の葬式によつて、屍が焼かれた時に、佛様と云ふ小さい骨、一般に喉の小さい骨と想像される骨が灰の間からさがされる。實際どんな骨だか、そんなかたみを調べる折がなかつたから私は知らない。

火葬のあとで見出されたこの小さい骨の形によつて死者の來世の有様が豫言される。その魂の次ぎの状態が幸福であれば、骨は佛の小さい姿の形になる。しかし來世が不幸になる時には醜い形になるか、或は全く形がない。

小さい男の子、隣の煙草屋の倅が一昨夜死んだ、そして今夜死骸が焼かれた。火葬のあとに残つた小さい骨に、三體の佛の形が発見された、それがあとに残つた兩親に少しは精神的慰藉を與へるであらう。

註 大阪天王寺ではこの骨が嘗へ投ぜられるが、その時の音で、又後生に關する知らせが與へられると信ぜられて居る。この骨が集まつて百年になると、それを粉末にして、それをこねて大佛を造ると云ふ事である。

四

雲集 九月十三日。出雲松江からの手紙に、私に羅字を供給した老人は死んだと云つて來た。(日本のキセルは普通三つの部分、即ち豆の入る程の大きさの金屬製の雁首と、金屬製の吸口と、一定の時に取りかへられる竹の軸からできて居る事を讀者は知らねばならない)この老人は羅字をいつも甚だ綺麗に塗つた、或は豪猪やまわらしの刺はりのやうに、或は蛇の皮の圓筒のやうに。彼は市まちはづれの變な狭い小さい町に住んでゐた。私はその町を知つて居るのは、そこに白子地藏と云ふ名高い像があるからである、この地藏は私は一度見に行つた。人はその顔を何かの理由で舞子の顔のやうに白くする、その理由を私はどうしても發見する事ができないで居る。

老人にお増と云ふ娘が一人あつた、それについて物語がある。お増は今も存命である。長い間幸福な妻となつて居るが啞である。ずつと昔怒つた群集が市中の或米相場師の家と倉庫を荒して破壊した。小判の大分交つて居る金銭は往來中にまき散らされた。暴徒(無教育な正直な農夫)はそれを欲しがらなかつた、彼等は盜まうとしないで破壊しようと思つた。しかしお増の父はそ

の晩泥の中から小判を一つ拾つてうちへ歸つた。あとで近所の人が告發したので彼は拘引された。彼を前に引出した判事はその當時十五のはにかんだ娘のお増を詰問して何か證據を得ようとした。彼女はもし續いて答へてゐたら、われ知らず父のためにならない證據を與へる事になるだらうと感じた、彼女は彼女の知つて居る事を何でも彼女に認めさせるやうに造作なく強ひる事のできる熟練なる審問者の前に居る事を感じた。彼女は黙つてしまつた、そして口から血が流れ出した。只舌をかみ切つて永久に無言になつたのであつた。父は赦された。その行爲に感嘆した或商人は彼女を娶つて年老つた彼女の父を養つた。

五

十月十日。子供の生涯のうちに前生の事を覚えてゐてその話をする日が一日、たつた一日だけあると云はれる。

丁度満二つになるその日に、子供は家の最も静かなところへ母につれられて箕の中に置かれる。子供は箕の中に坐る。それから母は子供の名を呼んで、『お前の前生は何であつたかね、云うてごらん』と云ふ。そこで子供はいつも一言で答へる。不思議な理由で、それよりも長い答の與へられる事はない。時に返事は謎のやうで、それを解釋するのに僧侶か易者を頼まねばならない事がよくある。たとへば昨日銅鍛冶の小さい倅はその不思議な問に對してただ『梅』と答へた。とこ

ろで梅は梅の花か梅の實か、女の名の梅かの意味に取れる。その男の子は女であつたと云ふ意味だらうか、或は梅の木であつたらうか。ある隣人は『人間の魂は梅の木には入らない』と云つた。今朝易者はその謎について問はれて、その男の兒は多分學者か詩人か政治家であつたらう、それは梅の木は學者、政治家、及び學者の守護神である天神の象徴であるからと斷言した。

六

十一月十七日。日本人の生活の事で外國人にはどうしても分らない事を書いた驚くべき書物を作る事ができよう。その書物のうちには稀れではあるが、しかし恐るべき憤怒の結果に關する研究がなければならぬ。

國民的法則として日本人は容易に怒りを表はさない。下層社會の間でさへ、重大なる威嚇は微笑と共に、君の恩は忘れない、こちらは感謝して居ると云ふ證言になる事が多い。(しかし、これは私共の言葉の意味で反語と想像してはいけない、それはただ婉曲な辭令で、——酷い事を本當の名で呼ばないのである)しかしこの微笑の證言は死を意味する事が多いとは云へない。復讐の來る時には不意に來る。日本國內なら距離も時間もその復讐者、一日に五十哩歩ける、荷物は極く小さい手拭に皆包める、忍耐は殆んど限りを知らないと云ふその復讐者には、何の故障にもならない。彼は庖丁を選ぶ事もある、しかしそれよりも刀、——日本の刀を使ふ事がもつと多い。

これが日本人の手で使はれると最も恐るべき武器となる、そして怒つた人が十人もしくは二十人を殺すに一分までではかからない。下手人は逃れようと考へる事は餘りない。古への習慣は人を殺したら自分で死ぬべき事になつて居る、それ故警官の手に落つる事は恥辱である。豫じめ準備をして書置をして、葬式の用意をして、事によれば（昨年の或物凄しい例にあつたやうに）自分の墓石まで彫つて置く。自分の復讐を充分に仕遂げてから自殺する。

熊本から餘り遠くない杉上と云ふ村にさう云ふ分らない悲劇が一つ、ついこの頃起つた。主たる役者は、成松一郎、若い店商人、妻おのと二十歳、結婚して僅かに一年、それからおのとの母方の叔父杉本嘉作なるもの、一度入監した事のある怒りつばい男、これだけであつた。この悲劇は四幕であつた。

第一段。場面——銭湯の内部。杉本嘉作入浴中。成松一郎入場、着物を脱ぎ、自分の親戚の居る事に気がつかないで蒸氣の立ちこめて居る湯に入る、そして大聲で叫ぶ、——

『ああ、地獄のやうだ、この湯は、あつい、あつい』

『地獄』は佛教の地獄の意味だが、監獄の事にもなる——この時は不幸なる暗合であつた。

嘉作（非常に怒つて）『おい小僧、喧嘩をする氣だね、何が氣に入らないんだ』

一郎（不意に出られてびつくりする、しかし勇氣を起して嘉作の調子に反抗する）『なに、何だ、

おれが何を云はうと勝手だ。湯が熱いと云つたつてお前にもつと熱くしてくれとは頼まない』

嘉作（けはしくなつて）『おれの失敗で一度ならず二度迄監獄に行つたつて何も不思議な事はない、貴様はばかか悪者にちがひない』

（互に飛びかかる隙をねらつてにらみ合つて居るが、互にためらつて居る、しかし日本人の口にしないやうな事を云ひ合つて居る。この老いたる人と若い人は互角の力だから手出しができない）

嘉作（一郎が怒つて来るに随つて静かになつて来る）『小僧、小僧のくせにこのおれと喧嘩する氣か。貴様のやうな小僧は妻などもつてどうする。貴様の妻はおれの親戚だ。地獄から來た男の親戚だ。おれのうちへ返しに來い』

一郎（今腕力では嘉作の方が上手である事が充分に分つたので、やけになつて）『おれの妻をかへせ。おれの妻をかへせと云つたな、よし、すぐかへしてやる』

そこまで一切の事は充分分る。それから一郎は歸宅する、妻を愛撫する、彼の愛を彼女に保證する、一切の話をする、それから彼女を嘉作の家でなく兄の家へやる。二日たつて日が暮れてかまもなく、おのとは夫に戸口へ呼ばれてそして二人は夜のやみに消える。

第二段。夜の場面。嘉作の家が閉ちて居る、雨戸の隙間から光が見える。女の影が近づく。

たたく音。雨戸があく。

嘉作の妻（おのとを認めて）『あゝあゝ、よく来てくれたね、どうぞお入り、お茶もおあがり』

おのと（甚だやさしく云ふ）『どうも有難う。が嘉作さんはどこにお出でですか』

嘉作の妻『外の村へ行きました、しかし直に歸る筈です。入つておまちなさい』

おのと（一層やさしく）『どうも有難う。ちよつとして又参ります。しかし、先づ兄に云はねばなりませんから』

（お辭儀する、暗がりにつつと入る、そして又影になる、これが外の影と一緒に居る。二つの影が動かずに居る）

第三段。場面、松の木が両側にある夜の河の堤防。嘉作の家の黒い影が遙かに見える。

おのとと一郎が樹の下に、一郎は提灯をもつ。兩人共白い手拭で鉢巻きをして、身輕に着物をきて、袖にたすきをかけて腕のよくきくやうにして居る。銘々長い刀をもつ。

時刻は日本人が、最も適切に云ふ通り『河の音が最も聲高く聞える』時刻である。松の葉に風が長い時々のつぶやきをする外は何の音も聞えない、秋の末で蛙の聲も聞えない時であるから。二つの影は話をしない、河の音が高くなるだけである。

不意に遠くでじやぶじやぶ音がする、誰かが浅い流を渡つて居る、それから下駄のひびき、不

規則なよろよろするひびき、酔どれの足音が段々近づいて来る。酔どれが聲を上げる、嘉作の聲である。彼は歌ふ、

『好いたお方に強ひられて、

や とんとん』

——戀と酒の歌である。

集 直ちに二つの影が、その歌ひ手の方へ走りよる、彼等の足は草鞋をはいて居るから、音はしないで軽く走られる。嘉作は未だ歌つて居る。不意にゆるい石が一つ足下で動いた、彼は足首をねちつて怒りのうなりを發する。殆んど同時に彼の顔に近く提灯がさし出される。恐らく三十秒程それがそこにちつとして居る。誰も物を云はない。黄色の光は三つの顔と云ふよりむしろ妙に表情のない面といふべき物を照して居る。その顔を見て、風呂屋の事件を思ひ出して、そして刀を見て、嘉作の酔が一時にさめる。しかし恐れはしない、そしてやがて嘲りの笑を突發する。

『へつへつ！ 一郎夫婦だな。おれを又子供だと思つて居るな。手にそんなものをもつて何をするつもりだ。使ひ方を教へてやらう』

しかし一郎は提灯を落して突然、兩手に力一杯をこめて斬り下したので、殆んど嘉作の右の腕が肩から離れさうになつた、犠牲がよろめくところを女の刀は左りの肩をつき通した。彼は『人殺し』と一聲恐ろしく叫んで倒れる。しかし彼は再び叫ばない。十分程二つの刀は彼に對して烈

しく働いた。未だ燃えて居る提灯はそのすさまじい光景を照して居る。おそく歩いて歸る二人の人は近づいて、聞いて、見て、足から下駄を落して物も云はずに暗がりへ逃げてかへる。一郎とおのとは仕事が悪しかつたから息をつくために提灯のわきに坐る。

十四になる嘉作の倅は父を迎へに走つて来る。彼は歌を聞いて、それから叫び聲を聞いた、しかし未だ恐ろしい事を知らなかつた。二人は彼の近づくがままにして置く。彼がおのちに近づくと、女は彼を捕へてなげ倒して、膝の下で彼の細い腕をねちて、そして刀を固く握る。しかし未だ喘いで居る一郎は、『いやいや、子供はいけない、その子は何にもしなかつたから』と叫ぶ。おのとは彼を放つてやる。子供は氣抜けして動く事もできない。彼女はひどく彼の顔を打つて『行け』と叫ぶ。彼は走る、叫ぶ事も敢てしないで。

一郎とおのとは斬りさいなんだ物を捨てて、嘉作の家へ行つて大聲で呼ぶ。返事はない、ただ死を覺悟する女と子供の悲しく蹲つて居る沈黙があるだけ。しかし彼等は恐るるに及ばないと告げられる。それから一郎は叫ぶ、

『お葬式の用意をなさい、嘉作は私の手でもう死んだ』

『それから私の手で』とおのとは金切聲で云ふ。

それから足音は退く。

第四段。場面、一郎の家の内部。客間に三人が坐つて居る。一郎、妻、及老母、老母は泣

いて居る。

一郎『そこで、母さん、あなたは外に息子がいないのですから、あなたを獨りこの世に置いて行くのは本當に悪い事です。ただお赦しを願ふ外はありません。しかし叔父はいつもあなたのお世話を致します。それで叔父の家へすぐに行つて下さい、もう私共二人は死なねばなりませんから。つまらない拙い死に方は致しません、見上げた立派な死に方を致します。そこであなたは見てはいけません。さあ、行つて下さい』

老母は悲嘆にくれながら出て行く。彼女の出たあとをしつかり戸締りする。用意ができる。

おのとは劍のさきを喉へつきこむ。しかし彼女はやはりもがく。最後のやさしい言葉で一郎は一打で首を切つて彼女の苦痛を終りにする。

そしてそれから。

それから彼は硯箱をとり出して硯を用意し、墨をすり、よい筆を選んで、そして注意して選んだ紙の上に歌を五つつくる、最後のはつぎの物である。

『冥土より郵便報があるならば

早く安着申しおくらん』

それから彼は自分の喉を立派に切る。

さて、これ等の事實が公に調査されて居る間に、一郎夫婦はひろく人に好かれ、又二人とも幼時から愛嬌があるので著しかつた事がよく分つて來た。

日本人の起源に關する學術的問題は未だかつて解決されてゐない。しかし時々一部マレイの起源を主張する人は多少の心理的證據を味方にもつて居るやうに思はれる事がある。最も溫和な日本女性の従順なやさしさの下に、(そのやさしさについては西洋の人はとても想像ができない)事實を目撃せずには全然考へられない冷酷の可能性がある。彼女は千度も容赦する事はできる、云ふ事のできぬ程感ずべき風に千度も自分を犠牲にする事ができる。しかし一つ特別の魂の神經が刺される事があれば、火が赦しても彼女は赦さない。さうなると突然その弱々しく見える婦人に、正直な復讐の信すべからざる勇氣、恐ろしい用意周到なる撓まない精神が現れる。男子の驚くべき自制と忍耐の下に、達するには甚だ危険な盤石の如き物が存する。妄りにそれにふれる事があれば赦される事はない。しかし怨みはただ偶然に激成される事は殆んどない。動機は嚴密に判断される。過ちは赦される。故意の惡意は決して赦されない。

富んだどここの家庭でも、客はよくその家寶をいくつか見せられる事がある。そのうちには殆んどきまつて日本固有なあのやかましい茶の湯に關する道具がある。多分小さい箱が諸君の前に置かれよう。それをあけると讀者は小さい房のついた絹紐で結んだ綺麗な絹の袋を見るであらう。その絹は甚だ柔かな凝つた物で、手のこんだ模様がある。こんな包みの下にどんな不思議な

物が隠れて居るだらう。その袋を開く、又違つた種類の、しかし甚だ立派な袋がもう一つある。それを開くと、驚いた事には、見よ又第三のがあつてそれに第四のをに入れて居る。それが第五のを入れ、それが第六のを入れ、それが第七の袋を入れて居る。その第七の袋に讀者が見た事のないやうな最も奇妙な、最も粗末な、最も堅固な瀬戸物の器が入れてある。しかしそれは珍らしいばかりでなく又貴重である、それは一千年以上を経た物である事がある。

丁度その通り數百年の最も高い社會教化は日本人の性格を包むに禮讓、優美、忍耐、溫和、道德的情操の多くの貴い柔かなおほひをもつてした。しかしこれ等の優しい幾重かのおほひの下に、鐵の如く固い原始的粘土が残つて居る、——蒙古のあらゆる血氣、——マレイのあらゆる危険なしなやかさでこねられた粘土が。

十二月二十八日。私の後庭を圍んで居る高い垣の向うに、最も貧しい階級の人々の居る甚だ小さい何軒かの家の茅の屋根が見える、小さい家の一軒からたえずうなり聲、——苦しんで居る人の深いうなり聲が聞える。一週間以上夜も晝も聞える、しかしこの頃その聲は段々長くなり高くなる、一息一息が苦痛であるやうだ。私の老いた通譯萬右衛門は非常な同情の顔をして云ふ『誰かあすこで大層悪い』

その聲が私をいらいらさせて来た。『その誰かが死んだら関係のある人々にかへつてよからうと思ふが』と私はむしろ残酷に答へる。

萬右衛門は私の悪い言葉の影響を拂ひ去るやうに両手で三度早い急な手振をして小さい佛教のいのりを口の中で唱へて、そして非難するやうな顔をして私のところを去る。それで良心に責められて私は病人のところへ女中をやつて醫者があるか、何か世話をしようかと聞きにやつた。やがて女中が歸つて来て、お醫者はきまつて来てくれる事、外に何も施しやうがない事を報告する。

しかし蜘蛛網のやうな手付はしたが、萬右衛門の辛抱強い神経はその響でやはり悩まされて居る事に気がつく。彼はできるだけ遠ざかりたいから往來に近い小さい表の部屋にゐたいとさへ白狀した。私は書く事も讀む事もできない。私の書齋が一番うしろにあるから、そのうなり聲はここでは殆んど病人がその部屋に居るやうに聞える。いつでもこんな苦しみの聲のうち、苦しみの強さの分る一種の物すごい音色がある、そして私は自分で問ひつづける。私がそれを聞いて苦しんで居るその本人に取つて、もつと長く苦しみつづける事ができるものだらうか。

午前おそくなつて、そのうなり聲が病室で小さい佛式の太鼓の音と澤山の聲の南無妙法蓮華經の合誦によつて打ち消されるのを聞くのは全く一安心である。たしかにその家に僧侶と親戚が集つて居る。『誰か死ぬのです』と萬右衛門は云ふ。そして彼も又妙法蓮華の讚美の聖い言葉をくりかへす。

題目と太鼓の音が幾時間かつづく。それが止むとうなり聲が又聞える。一息一息がうなりである。夕方になると一層悪くなり恐ろしくなる。それからそれが不意にとまる。數分の間死のやうな沈黙がある。そしてそれから烈しい泣音が聞える。女の泣き聲、それから名を呼ぶ聲。萬右衛門は『あ、誰か死んだ』と云ふ。

私共は相談をする。萬右衛門はその人々は哀れに貧しい事を見出した、そして私は良心が咎めるから甚だ僅かの金ですむ葬式の費用を贈らうと云ふ。萬右衛門は私が全くの善意からさうするのだと思つて美はしい事を云ふ。私共は女中をやつて好意を傳へさせ、又できる事なら死人の履歴を知るやうに指圖した。私は何か悲劇らしい事のある事を思はず居られなかつた、そして日本の悲劇には大概興味がある。

十月二十九日。私の察しの通り死人の話は聞く價值があつた。その家族は四人であつた、父、母、二人とも老年で弱つて居る、それから二人の息子と。死んだのは三十四の長男であつた。七年間病んでゐた。若い弟は車屋で一家を唯一人で支へてゐた。彼は自分の車をもたない、一日使料を五錢拂つて他人から借りてゐた。強壯で、走る事が早いが儲けが少かつた、その仕事にはこの節競走が多過ぎて利益が少い。兩親と病人の兄を養ふのに全力を要した、不撓の自制力がなければ、それをする事はできなかつたらう。彼は一杯の酒を飲むと云ふ楽しみさへなかつた、彼は獨身でゐた、彼は唯兩親と兄に對する義務のために生きてゐた。

これは死んだ兄の話であつた、二十の頃、魚屋の商賣に従事して居る時、彼は或宿屋の綺麗な

女中を愛するやうになつた、その女は彼の愛に酬いた。彼等は互に深く約束した。しかし結婚に邪魔が起つた。女は多少財産のある人の注意を惹く程綺麗であつた、その男は習慣通り彼女を貰ひに來た。彼女はその男を嫌つた、しかしその男の申込みの條件は兩親をその方へ決心させた。一緒になれないのに絶望して二人は情死をする事に決心した。どこかで夜彼等は會つた、酒を酌交して二人は約束を新たにし、世間に暇乞をした。若者は劍の一打で愛人を殺してすぐあとで同じ刀で自分の喉を切つた。しかし人々は彼の息の切れないうちにその部屋へかけ込んで、刀を奪ひ取り、警官を迎へにやり、師團から軍醫を招いた。その未遂の自殺者は病院へ運ばれ、巧みに看護されて健康になり、それから數ヶ月の恢復期のうちに殺人犯の取調を受ける事になつた。

どんな宣告が下つたか、私はよく知る事ができなかった。當時日本の裁判官は人情にからんだ犯罪を扱ふ時に餘程自分の獨斷的判断を用ひた。そして彼等の憐みの行は西洋の模範でできた法典で未だ制限される事はなかつた。多分この場合では情死に生き残つた事それだけが甚しい罰であると考えたのであらう。輿論はこんな場合には法律よりも無慈悲である。禁錮の或期間のあとでこの不幸な人は家へ歸る事を許されたが、たえず警察の監視を受けてゐた。人々は彼を避けた。生き残つたのは彼の誤であつた。ただ兩親と弟は彼の味方であつた。そして間もなく彼は名狀のできない肉體の苦痛の犠牲となつた。しかし彼は生に執着してゐた。

當時事情の許す限り巧みに手當はされたが喉の古疵は恐るべき悩みを起し出した。表面は直つてゐたが、何か徐々たる癌腫的形成がそれから擴がつて刃の通つた氣管の上下へ達した。外科醫

の刀、焼鑊の苦しみはただその最期を延すだけであつた、しかしその人はたえず増加して来る苦しみの七年間生き長らへた。死人を裏切つた結果、一緒に冥途に旅しようとして互に約束をした事を破つた結果について不吉な信仰がある。殺された女の手がいつでもその疵を又開いたのだ、外科醫が晝のうちに仕上げた事を夜又もとにかへしたのだと人々は云つた。夜になると苦痛はいつでも増し、心中を企てた丁度その時刻には最も恐ろしくなつたからである。

その間節約と自制とによつて、そのうちの人々は藥代、看護人、及び彼等自身がかつてそんな贅澤をした事がないやうな滋養物に拂ふ方法を講じた。彼等は彼等の恥、貧乏、負擔になる物の生命をできるだけの方法で延した。そして今死がその負擔を取り去つたので彼等は泣く。

小 泉 八 雲 集
 恐らく、私共凡てはどんなに苦しくともそれに對して犠牲をするやうになつて居る者を愛するやうになるのである。實際私共に最も多くの苦痛を與へる者を最も多く愛するのではないかと云ふ疑問を起してもよからう。

(田部隆次譯)

Bits of Life and Death. (Out of the East.)